

金子春夢の小説 (一)

—「革羽織」まで—

和信谷告

氏の執筆)がある。そこでは春夢は社会小説家として位置づけられている。

小論では春夢の習作期の諸作から「革羽織」に至る展開を考察する。

一

まえがき

金子春夢は明治四年十一月の生まれ⁽¹⁾、本名佐平(『東京雑誌』は表紙に「主幹金子春夢」、奥付に「編輯人 金子佐平」と明記している)、別号春夢亭主人、斬馬劍禅(『東京雑誌』に掲載された『東京新繁昌記』の広告に「斬馬劍禅金子春夢編述」とある)。

大江義塾の出身であることがわかつてゐるが、出身地、経歴等については不明のところが多い。民友社の給料支給簿によれば、春夢は明治二十三年一月に探訪員として入社し、六月から編集員になつてゐる。

金子春夢に対する研究としては、柳田泉「古い記憶から(五)――社会小説家金子春夢――」(『文学』第二八卷第五号所収、のちに『明治の書物・明治の人』に収録)および『明治文学全集』第三十六卷『民友社文学集』解題(『金子春夢』の項は榎本隆司

学生に絶交状を送つてくる。その後医学生と娘とは疎じく暮らしている。このような梗概の作品である。

題名の示すとおり、テーマはたあいのない作品であるが、登場人物の性格が描き分けられており、描写もかなり詳細である。医学生三村辰雄と法律書生田代三郎の二人の書生の対照的な性格が描き分けられている。辰雄が温順・優柔・沈着・円満なのに對し、三郎は磊落・短気・感情的である(このうち磊落とは言葉の上で書かれているだけで、そのような具象的描写はなされていない)。

女中お春は一人姉妹の姉の方で、姉妹とともに先天的な聾啞であるが、美しい。姉妹の父親は酒問屋を営み、番頭と小僧の二人を使つて裕福な生活をしていたが、母親が仮初の病で死ぬと、つづいて火事で類焼し、家も家財道具も一切を失くし、次いで父親が寝つきの病氣にかかり、姉妹が内職でかろうじて露命を繋ぐよう不幸に陥っている。こういう経緯が設定されているが、それがかならずしも本筋やテーマに不可欠のものとして結びついてはいない。

姉妹を美しい少女に描き、親に孝養を尽くす優しさや、姉妹の間の睦じさ、またその純真な邪氣のなさを描いて、そこに作者のヒューマニスティックな同情が感ぜられるのであるが、結局作者は高い所から見下している。

「或る西洋の神学者の説に、人、禽獸と異り^{ヒトビト}詞を解する自由を得たるは、神より許されたる特權、若し此自由を失ふものは神にはいられない。

などはまったく具象化されていないし、三郎も裏面の短気・邪慳さと反対に内面とくに誠実であるようには具象化されていない。このように抽象的叙述と人物形象や作品展開の間に一貫性を欠いているのである。

以上見てきたように、「縁は異なるもの」は欠陥の多い不完全な作品ではあるが、そこにはすでに春夢の弱者への同情を示す傾向・素質が見られるのである。

雅俗折衷に處々に言文一致と体言止めを交えた文体である。つづいて春夢は『鉄和尚』という作品を『千代見筆』に発表したらしいのであるが、この作品は未見である。

二

ついで春夢は明治二十四年十一月三十日に春陽堂より『文学世界』第九として『今深雪』を出している。半紙判木版摺彩色表紙の和装本である。

十七歳の時突然発病した娘が、箋医者や祈禱に頼つているうちに、危篤になり、やっと眼科医によつて一命をとりとめるが、失明してしまう。絶望のうちに、母の深い愛情によつて、乞食への施しや、まじないや、日頂様への参詣や、トイなどに惑いながら、日々を送つてゐる。十九歳になり、両親は娘の将来を思つて、財産つきで縁談を考え、人々に頼んで婿探しをする。箋医者の世話で名主の次男が決まる。が、娘は相手が財産目当てと邪推

対し非常の罪を犯したるなり。仏家に言はしても、啞娘姉妹の因縁には随分と入り込むだ所說もあらう(四)といわれない因果応報説による解釈を持ち出している。お春に對して辰雄は優しく接するのに比し、三郎は邪慳であるが、内面には誠心があると述べ、お春が外面の挙動によつて、辰雄に親しみ、三郎に遠去からうとするのは、お春に人の内面を見る力がなかったからであるとして、次のように述べている。「上部からの觀察は驚くほど敏捷で、目顔の色を見て飽くまで人の心を読みど、啞の悲き、お春の才発へどうも皮想の鑑定が誤まられて、つひ馬爪の偽物を籠甲、アルミ台の鍍金を金無垢と見るゝ是非もなき次第であつた」(五)。「慈悲な主人の思慮の洗浴を厭ふて、悪人の麵包に尾を持つ犬、畜生の比喩^{ヒメイ}と置かるゝお春、怜俐でも啞の甲斐なきものなり」(五)。ここに聾啞者は愚かであるとする偏見が見られ、こうしたところにすでに春夢の思想的限界が現われているのである。

しかも辰雄が内面性悪で、お春がその外面にだまされて、不幸になるようには展開しない。三郎から絶交状を受け取つた辰雄は、三郎の信用をなくした以上、お春に出て貰おうと言うのであるが、お春には辰雄の言葉は聞こえず、また漢字まじりの三郎の絶交状も読めないとために、にこにことしている。そのうちおだやかならぬ辰雄の氣色に、何か粗忽でもしたかと思ひ、涙ぐむ。その様子を見て、辰雄はお春を憐れに思うのである。辰雄は「近頃篤行と勉強家を以て評判宣し、中よは辰雄を偽善家と譏る人もあ」(二)るが、前に引用した叙述のよう、その裏面の人の悪さと三部に分けて書かれている。

この作品の題名は通称『朝顔日記』の主人公深雪(瞽女朝顔)の名を取つて名付けられている。『朝顔日記』は広津柳浪の祖父雨香園柳浪の読本や歌舞伎『けいせい筑紫教』、淨瑠璃『生写朝顔話』など、深雪と宮城阿曾次郎のちに駒沢次郎左衛門の恋物語がお家騒動を背景に展開する江戸期の作品である。『今深雪』は現代(明治)の朝顔であつて、この版本の表紙は久保田米櫻の筆で鮮麗な朝顔の花を宇治柴舟を描いた扇面に配し、見返しは盲目狂乱の女を扇面に配して、『朝顔日記』を背景とした作品であることを示している。

この作品に対しても十二月十八日、十九日の『改進新聞』紙上に柵山人が「文藝界 第九『今深雪妄評』と題する批評を書いている。

この柵山人は本名堀本貞一といふ硯友社の新進作家であったが、窃盜罪で逮捕され、明治二十五年十二月二十四日東京地方裁判所で重禁錮一年の判決を受けた。後に昭和六年十二月二十六日、宮武外骨によつて『柵山人小説全集』が編集発行された。そ

の「緒言」や後記等に紹介がある。勿論事件後は文壇・社会から葬られてしまったのであるが、この『柵山人小説全集』には逮捕されるまでの作品はほとんど洩れなく収録されているようである。

『都の花』などの一流雑誌に作品が掲載され、かなり才能の見られる作品を書いている。それらの作品は「櫻の雪」(23・4『日本文華』)、「艶火舞」(23・8『都の花』)、「粹詩集」(23・12『都の花』)、「めつき牧師」(24・10『金港堂小説叢書』)、「恋八景」(25・4『都の花』)、「太郎丸のことごとく」(25・10『攬迷雜誌』)である。

さて、この柵山人の『今深雪』評によると、日頃昵懇の春夢から献本、批評を乞われて、その責を果たしたという。

『今深雪』は「臘眞目を脱して」(『文学世界』)の「稀物」であり、「卷中の人物お清母子の性質一々明かよ解剖され」(中略)。上の巻より医師得庵の性行穿ち得て妙。お清が盲目なる件さら／＼としてよし。中の巻ハ全篇中の圧巻。昔氣質の母親の心中。開明の世よ此な人が……と。頭からけなしでこればそれ迄なれど、(中略)其微を摘發するが作者の妙技。(中略)さして面白くもないもの、作者が注意の跡見えて、前後照應して方位よ眠む女性の心中。さてよく描かれたり。お清の婿の生家に狐の棲んでいたという趣向もよい。「殊よ夢の一節などへ、所謂俗うけのよろいき処」(以上十二月十八日、二六五六号)とこのよう相当地評価をしている。また「今深雪ハこれ純然たる悲哀小説なり」とし、文体については「これ亦一種の鶴文。嵯峨のや及

び忍月諸子とも同じくらずして、宛然草村流よ美妙齋の言文一致を加味したるが如し。これを言文雅俗調と云ふ」と批判している。そうして「差引今深雪ハ八分の出来。思へば煩なる文學界も捐軀取名の新文士出でたると、僕が其人と辱交の榮を得たるの欣び。春夢どの万歳! 今深雪万々歳!!!」(以上十二月二十九日、二六五七号)と結んでいる。

これに対して春夢は十二月二十四日の『国民新聞』紙上に「柵山人に答ふ」という短文を書いている。これは柵山人の批評に対する挨拶であり、柵山人が「叫ぶ涙よ轡る声とハ僕未だ聞かざる声音。どんなものだかおをしへを!」(十二月十八日、二六五六号)と述べたのに対しては、「成程これには一本参りたり、されど我に許すに弁辞を以てせば、其声音は咽喉を轡り破りて発する声、則ち輪軸に油なき車が行々轍らす声と思はゞ大差なかるべし」と答えている。

この作品は柵山人の言うように、一編の悲劇であるが、その悲劇の原因を考えてみると、まず発端部における急性的眼病による失明が根本原因である。しかしながら発病がかならずしも失明に至るとは言えないのであつて、相当な難病らしい容態ではあるが、まずまったく医学のわからない、口先だけで患者をあしらつてきた近所の漢方の鍼灸者にかかるて、正しい治療は全然して貰えなかつた、というよりも逆治療をしてきたこと、祈禱などの迷信に頼つてきたことで、みすみす治療の時期を失してしまつたために、失明に至つたのである。そういう無知蒙昧さが悲劇の原因

となつてゐるのである。

母親は娘を非常に愛していて、「成らば己が命を代としても、娘の一方の眼なりとも生かして遣りたい」(七葉オ)と思つてゐるほどであるが、きわめて迷信深い。鍼灸方医と祈禱とで娘が危篤に陥つたので、「人の勧告に任せ、駿河台の名医の治療を請はんと、既に準備までしたれど又も親の頑固、方角が悪いと御弊で沙汰止みとな」(三葉オ)。失明した後も、迷信に頼らうとする行為が続く。こういう母に育てられたのであるから、娘のお清自身もまた迷信家である。「お清西の性の生れなり、前世は大金持の驕奢に任せ金錢を湯水のやうに費ひ散した応報は此世に盲目」と書て仏信心すればよしと三世相に載せてある、して見れば一向専念仏様にお絶申さば、枯木に花の時節もあるべしと、それを力頼みに味気なき月日を」(五葉ウ)送る。今の不幸は前世の因果応報で、仏信心もそういう迷信からである。だから「窓の側に乞食物貰ひの類を呼び、手づから錢三文宛施すこと、毎朝起きて米百粒を一個づつ、お題目を唱へながら目に押し当てゝそれを庭に撒いて軒の雀を養ふのが日々の勤」(六葉ウ)である。「外出は毎月廿五日長坂の日頂様へ参詣すると、有隣堂の売ト申すには、娘の盲目となつた因縁は、三代前の先祖の死靈が來りたると易の表に顯はれた。さう聞いて見れば此娘まだ乳呑の頃、先祖の墓の芝原で乳母が小用をさしたこと、かすかに母親は覚へて、其命日には必ず芝三田の檀那寺へお参りに行く」(六葉オ)。母親はトイを信じ、先祖の死靈の祟りと信じてゐるのである。「如何なる前世の業

障?、何の物?、を、それよ、夫が人の云ふ事構はず去年十月金神を汚して廁を立てた其障礙か、日曜日花見に行つたは方角が悪かつたか、無論其後は止みがたき要用の外は上野辺へは足踏みもせず、帰途に松田に寄つて喰た鯛の塩焼が、もしや娘の毒ではなかつたかと、日常は大の好物のこの魚は一切家に入れないやうになつた」(七葉オ)。このように行爲をすべて迷信に結びつけて考えるようになる。また「母親は何處からか禁厭の御符を戴いて、壬子といふ日に急患如律令と、娘に三度唱へさして水にて咽喉を下し」(八葉オ)というようになお呪いに一縷の希望を繋いでいるのである。

娘の失明の一因に以上のようないくつかの迷信があったのである。

当時の世間にはこのようないくつかの迷信は到るところに見られたのである。「甲子男子の生血を濁」(げば)「即座の平愈」が得られる(七葉オによる)。というようなことも信じられていた。お清の婿に決まつたのは駿州吉原在の名主の次男で、「男振も醜からず、教員を勤めた丈ありて、算筆も達者で、身軀の動作も差して賤しからず」(十葉オ)。といふ「素生もよく、而も縹致恥しからぬ」(十一葉オ)青年で、盲目のお清にとつてはまたとないような縁である。それというのが「此名主の家は少々仔細ありて、嫁に遣りまた養子に貰ふことを所のものは厭がる、其理窟は其家に年ふる狐棲みて、其数幾疋と知れず其所の背戸、此處の樋の下を往来するを人の眼にも触れて、此家と縁を結べば直と狐め、人と共

に移転若しくは隨從する野蛮な説が先祖の代から言ひ伝へてある。それで次男殿はまだ部屋住、三十に成つても配偶ないとのこと」(十葉オ)である。作者がこの作品中にこのような迷信を多く挙げているのは、狐の話を「野蛮な説」としていることからも、このような世間の無知に対する批判があつたからと考えられる。

そうしてお清と母親はこのように知性を欠くが故に、お清自身は人を正しく見抜くことができず、判断を誤り、盲目の身には得難いほどの結婚を自ら壊してしまつたことが、悲運のさらなる原因である。

この辺のお清の心理はかなり詳しく述べかれている。母親がお清を慰めるために頼んだ唱歌の教師今井順郎は、和歌山県の士族で、東京高等師範学校を卒業し、小学校教師の職にあり、授業が懇切で、生徒もよく懐き、評判のよい青年である。このように順郎の経歴が婿よりもまさって設定されている。彼はお清を愍み、いつも優しく慰めてくれる。始めのうちは通り一遍のお世辞と聞き流していたが、日を重ねるにつれ、その親切が身に滲み、順郎が眞實に自分を憫んでくれるのかと思つて聞くと、その一言一句が眞面目なようにも、じらすようにも受け取れる。順郎の同情は心の真底から熱い思いをこめて出たもので、愛の要素もあるかと思われる。ある時さし向かいで話が佳境に進んだ時、お清が「私のやうな不具のものが何で嫁入がされませう、大概にお調戯遊ばせ。」と言うと、男はすかさず「いえ、さう落胆したものではありません、貴女の清らかお心を信じて、同じ心を持つものは世に

の不幸について論じた次のような一節がある。

嫁入は女の身には吉凶禍福の分目、これ一つでどちらにか運命は定るものなり、男なれば名教の文字の上にも七去の明

文があつて脛替の特權を実行しやうが、社会の制裁が充分でない間は、誰もそれを嘲るものなく亦不思議と思ふものなし。無残、女は生から死まで三従の法則に縛られ、亭主顔の権幕に怨を呑み、不愉快の生活を送るもの往々ある話、好しきが厭ぢやと家を出れば、人は疎には言はず、嫁に行くは棺を出すも同じやうなもの、白無垢の重衣もそれに擬へてあるそうな、三界無庵!、去られて生家に帰れば世は男だけに肩を持たず秋の扇と同じ待遇、果は涼爐の側に畢生を過す果敢なき、女にはなるまじきものなり(十葉ウ~十一葉オ)。

蘆花「不如帰」(31・11・29~32・5・24『國民新聞』)に先立つ痛烈な感慨である。このような女の身の不幸を社会のしきたり・制度を原因として説いた一節は、春夢の封建的社會制度への批判を明確に示していく、注目すべきところであるが、このことが具体的な作品の構想の上に具象的に主題化されておらず、お清の悲劇の原因が、上述したように、突然原因不明の眼病で失明するという、きわめて偶然性の強いできごとに支配されていて、封建的男女関係への批判は単なる抽象的論理に終わっている点が、作品としての弱点なのである。だが、無知からくる治療法の誤りや、迷信深さや、人を見る目の欠陥が、不幸の原因である点は、構想上に具象化されていて、春夢の批判精神は充分に示されているのである。

この作品は社会小説というよりは、失明から発狂という展開・結構から見ても、むしろ悲惨小説に先立つものというべきである。

「縁は異なるもの」とは身体的障害をもつた女性を描いている点で共通しており、柵山人が「界第九今深雪妄評(続)」に評しているように、「縁は異なるもの」が滑稽小説であるのに対し、これは悲哀小説である。コメディーからトラヂエディーへの作風の転換を示しており、これよりのち春夢の文学は主として悲劇的展開を示す作品が中心となつていくのである。作品の具象性においても数段の進歩を見せていく。

文体はこれも柵山人が鶴文体と指摘したように、雅俗折衷と言

ついで二十五年四月三日の『國民新聞』に「紡績婦」と題する小品を載せている。肺病を遺伝的に身に受けた若い紡績婦の不幸な半生と地震による工場倒壊のための悲惨な死を述べているが、社会性は見られず、薄命の女の生涯を述べた小品である。が、弱者への同情という点で春夢の傾向を示している。

主人公利女の死は明治二十四年十月二十八日、午前六時三十八分十五秒に起こった大地震による浪花紡績会社の倒壊によるものと設定されており、「浪花紡績会社の機械場は、百層の煉瓦天辺半にも至らざる年若き一人の紡績婦、五駄碎けて目も当てられず、骨まで透きて青白き手と足の片々は、こゝ、そこに!」と叙述されている。

ところで明治二十四年十月二十八日のこの大地震は事実である。翌二十九日の『國民新聞』には「(○近年稀なる大震)」という見出しで報ぜられていて、中央氣象台の観測によれば、発震は二十八日午前六時三十九分十一秒、発動の時間七分間として、震動のデーターを詳細に記し、主な被害が報道されている。以後も

岐阜や名古屋を中心として連日余震の記録や震災地の惨状が掲載され、各地で数千人の死者が出ていることが報ぜられている。紙上震災義捐金の募集も行なわれている。三十日の附録には「大坂発(廿九日午前五時四十分)」として、「廿八日午前六時四十五分に強大なる地震あり震動時間四十六分間、西成郡に在る難波紡績会社工場倒れ死亡三十五人重傷二十五人軽傷四人あり」と報ぜられている。とくに十一月一日には「大阪の大地震(惨又惨)」と題して、次のような記事が掲げられている。

大地震の振り出したるは同(二十八日午後六時——筆者注)

三十八分十五秒なりき(中略)此震災にて尤も惨状を極めた

るは西成郡伝法村の浪花紡績会社なり男女の職工は先を争ふて逃出んとするも足元ヒヨロつき殊に大勢の事なれば容易に逃られず又は無残なる即死を遂げ重傷者少からず或は手足を

異にして死いたる、或は繩帶より漏る出血淋漓たる又眼球飛

出して三四寸も垂れ苦し氣に歯を噛しめて死したる、陳野と

しと云るが肛門より臓腑出て死したるなど其惨状も当てら

れぬ有様なりし其他の工場にも破損負傷ありしと雖も浪華紡

績会社の悲惨には比ぶべくもあらず(傍点筆者)

「紡績婦」の利女の死はこの報道を踏まえて、設定しているこ

とがわかる。

次に六月十日の『国民新聞』紙上には「日光山紀行(三十分間の見物)」という紀行文を載せている。短いものであり、往路の車中に「一分の一、日光見物の部分は約六分の一、帰途の車中が三

分の一」という叙述の配分は題名にそぐわぬ紀行文で、往復の車中乃至車中から見た情景が中心となっている。

農夫の苦心を思い、「粒々是れ辛苦」と小見出しを掲げて、所詮暖衣肉食者流宣しく一觀すべきもの」と述べている。すぐ統いて「俗物」として二人の芸者を連れた車中の七人の紳士を叙している。また利根川の氾濫の名残を目にして、「当年の水害の

惨状を想起し、いかに窮民の天にさげびしやに至れば、そぞろ酸鼻にたへず」としている。「西洋人の贅沢」ではアメリカの豪商夫妻の豪遊を述べている。「帰途」には中禅寺湖畔より帰京の遅塚麗水と奇遇している。

このようにこういう紀行文にも春夢の窮民・弱者への同情と富者への批判を見ることができる。

ついで十月三十日の『国民新聞』に小品「まゝ子」を掲載している。これは幼くして両親を失った、性格も才覚もすぐれた可憐な小児が、毎日商いをして、まま母のために尽くしながら、酷薄非道、鬼のよくなまま母に虐待され、ついに死に追いやられることを叙し、同情を注いでいる。「紡績婦」と同じく、弱者への同情が見られ、春夢の傾向を示している。

以上の明治二十四、五年を春夢の習作期と見てよからう。小説としてはなお試作の域を出ていないが、すでに春夢の弱者に対する同情の傾向は明確に表われているのである。

四

明治二十六年になると、『家庭雑誌』の「社交一斑」「流行の栄」等の欄に一月十五日発行の第五号より春夢の署名が見られ、以後この欄には二十八年十一月二十五日の第六十六号まで春夢の署名が続き、以後は「流行子」という署名に変わる。この「流行子」が春夢と別人であるかどうかは検討すべき点であるが、内容に変化が見られないでの、「流行子」は「流行の栄」欄での春夢の改号と考えてよさそうである。この欄は流行の服装・持物・道具・風俗等について絵入りで詳細に説明したもので、彼がこういいう点で始終熱心に研究し、物識りであつたことがわかる。そしてその調査にいろいろな場所へ出向いたであろうことが、彼の小說に種々な場所・職業の人たちを登場させる材料を提供したであろうと考えられる。

この間に春夢は明治二十七年十一月二十日より十二月二十九日まで二十三回にわたって『国民新聞』に小説「革羽織」を連載した。この作品はのちに二十八年十一月五日民友社より出版された『第五国民小説』に収録された。

弟子を骨董屋相模屋幸平(相幸)に助けられた大工の棟梁革羽織の辰五郎(革辰)は、悪党堀田に騙され、千二百円ほどの大金を詐取された相幸のために、堀田を探し出し、殴り殺すが、金を取り返すことはできず、革辰は入獄するという悲劇に終わる。

弟子を骨董屋相模屋幸平(相幸)に助けられた大工の棟梁革羽織の辰五郎(革辰)は、悪党堀田に騙され、千二百円ほどの大金を詐取された相幸のために、堀田を探し出し、殴り殺すが、金を取り返すことはできず、革辰は入獄するという悲劇に終わる。

になり、相幸は熱くなるほど、負けが込む。そのうち二十札にしるしがつけてあることに気づき、相手を責めて、堀田を証人に求めるが、いつの間にか堀田は座を外している。相幸と田舎大尽が争う騒ぎに紛れて、立花が三人の金を持ち逃げする。興奮する相幸に、堀田は警察にも届けられないし、立花の住所は知っている。三度目に訪れたとき、やっと帰っていたが、立花は行方をくらましてしまったと言う。相幸の困り果てた様子を見、堀田は自分も困っていると言い、この損失を取り返すために紙幣賃造を企てていると打ち明け、その機械を見せ、仲間になるように誘いかける。堀田は相幸に本物の五円紙幣を見せ、これは賃造だと言つて、その精度を信じさせ、また原料の荒仕上げ紙幣を見せ、これを本物と寸分違わぬ賃造紙幣に仕上げる薬品を見せる。さらに躊躇する相幸に、もしも発覚したときには、身替わりになる男もぞの家族への救助の手筈も調えていると言つて、安心させ、客の品物まで入質してつくった金を失つて困惑している相幸を誘い込む。そうして多額の資金が必要だから、荒仕上げ原料紙幣を買う半額の五百円だけでも負担して欲しいと言う。この時も堀田の女房は酒を用意して出す。相幸は養子の身であるため、養母と妻につくり、堀田の家へ持つて行く。堀田は仕事は相幸の奥の間がかかるつて安全だからと、相幸に機械を託し、自分は千円で原料紙幣

五

ここで小説家金子春夢の習作期から成熟期への展開・発展の様

子を『今深雪』と「革羽織」との比較によつて考察することとする。

『今深雪』は世話物的な作品である。だが、無知が原因の迷信深さや判断力の欠如が主人公を不幸にしているところに、この悲劇的作品に表われた作者の批判力が示されており、また具象化が不充分で、観念的ながら、女の不幸の原因を社会制度に見ているところに、春夢の社会批判を見ることができる。これが「革羽織」になると、社会認識が深刻になり、悪党が登場して、正義が悲劇を回避できない現実が描かれるようになる。この場合にも、堀田に乗せられる形で、段々深みにはめ込まれていく相幸や、正義感は人一倍強いが、直情徑行的に行動したため、結局は相幸を救えず、みずからも殺人を犯してしまった革辰の対処の仕方に、知性の欠如のあつたことは確かであるが、この作品ではそれが作者の意図にはなつていず、むしろ人の良い律義な人物や、正義感の強い、寛容な人物が陥つていく悲劇を、同情的に描いており、悪党がのさばる社会を深刻に描き出しているのである。

『今深雪』では、当時の庶民の間でなお多く見られたであろう迷信深い母娘の人物形象が、相当リアルに描かれているのであるが、「革羽織」では、『家庭雑誌』の「流行の業」欄の調査・執筆で深められたであろう詐欺師や侠客の人物など特異な人間像を鮮明に描き分けるようになつていている。

『今深雪』にも一途に娘お清を愛する母親の心理や、お清が婿養子を疎み、唱歌の教師今井順郎に引かれてゆく心理が、相當に

を取り寄せて、明朝までに参上すると言う。ところが、翌日待つても堀田が来ないので、訪ねると、堀田は昨夜の間に夜逃げをしてしまつてゐる。勿論田舎大尽も立花も共謀者なのである。堀田は掏摸で、律義な世間知らずの人の良い相幸を巧みに罠にはめ、一千三百円の大会を詐取してしまうのである。その巧みな手口と、それに乗せられてゆく相幸の心理が詳細に叙述されている。春夢はこういう詐欺師や義侠心の強い、一本気な、竹を割つたような革辰の人物像を巧みに描いている。

そうして正義がかなはずも結果として報われないところに、春夢の社会認識が甘くないことを示している。柳田泉氏は「法がこうした社会悪を未然に防いでくれなければ、結局相手を殺すより外社会を正しくする道がないことになろう」と述べておられる。観念小説・深刻小説の先駆的作品である。

田舎大尽が花札で口ほどもなくたちまち堀田に五百円を負けるところを「『デク』の田舎漢が連戦連敗の見苦しき有様は譬へば支那兵が日本軍に大敗するも斯くやと思ふばかりなり」(第十回)と、民友社の日清戦争への姿勢を反映したような叙述をしているところには、春夢の正義感、義侠心、弱者への同情も国境を越えられなかつたことを示している。

描けていて、心理的要素を具えているが、「革羽織」でも詐欺師堀田の手口に巻き込まれてゆく相幸の心理が、無理なく描かれている。春夢の小説家としての觀察力や技術的素質が示されている。

『今深雪』では無知のためにその治療・対処を誤った一面もあるとはいゝ、主人公お清の突然の発病による失明という偶然性が、悲劇の最大の原因となつてゐるところに、その欠陥が存するのであるが、「革羽織」ではプロットの展開の上にそういう偶然性がなく、リアルな展開を見せ、その進歩発展を示している。

また『今深雪』では娘が盲目であるということ以外に、作品の展開上では関連がないにもかかわらず、『朝顔日記』を背景に置いて、『文部省令深雪妄評(続)』で柵山人に指摘されたような、通ぶつた態度を見せてゐるが、「革羽織」ではそつとしたところも見られなくなつてゐる。

『今深雪』ではかなり裕福な家庭を扱つてゐるのに対し、「革羽織」では小商人・職人・詐欺師・掏摸というような庶民・貧民の世界を描き、ここにも春夢の社会觀・社会觀察の深化が示されている。

最後にこの間の春夢の文壇的、文学史的位置を一瞥しておきた。春夢の文学的出発と「革羽織」執筆の間には三年間の隔たりがある。この明治二十四年から七年の間には幸田露伴・尾崎紅葉・広津柳浪・斎藤緑雨・樋口一葉などが最も充実した作品を書いてゐる。このような文壇の状況の中で、金子春夢の小説は紅葉や緑

雨とは異質であり、特異な世界を世話物風に描いている点では、露伴に通うところがあり、民友社の平民政義を反映して、弱者の同情を示している点では、一葉にも通ずるところがあるが、

深刻小説の先駆的な悲劇的結構をもって出発しており、廣津柳浪は最も近い作風の作家と見ることができよう。そうしてこの傾向はその後も一貫していくのである。

注① 柳田泉「古い記憶から（五）——社会小説家金子春夢——」（『文学』第二八卷第五号所収）による。

② 花立三郎著『大江義塾——民権私塾の教育と思想』に出身地不明六十六名の中に金子佐平の名が挙げられている（P二五四による）。

③ 柄山人「界第九今深雪妄評（続）」（『改進新聞』明24・12・19、二六五七号所載）、春夢「柄山人に答ふ」（『国民新聞』明24・12・24、六一一号所載）による。

④ これは『今深雪』の本文中に「お清殿万歳！万々歳!!!」（十一葉オーヴ）とあるのを、からかつたのである。

⑤ 本文は木版摺で草仮名を使用しているが、いずれも普通の平仮名に直して引用する。

（あしゃ・のぶかず 本学教授）

『夢幻』考

——『九雲夢』との比較——

塚田満江

「署名なし」ながら、『夢幻』^①の作者と推定される小宮山桂介、雅号天香の家系は、中世信濃国郷士出自、武田家に仕えた小宮山丹後守昌友あたりから明らかにされる。水戸藩士となつた曾祖父、祖父共に、昌の字を冠し、父昌堅の末子（五女六男）、幼名磯五郎、成人名昌経が、のちの天香、即眞居士である。

徳川御親藩に、「武」より「文」をもつて仕えた家柄として、『韓使（李朝通信使）』と唱和応酬の記録もみられるが、半井家のように『三国史記』『高麗・李朝漢籍』『東醫寶鑑』等を、少くとも三代にわたつて教養書とした歴史はない。まして『春香伝』『九雲夢』等の『謠語（うたがたり）』『花郎』史記列伝に親しんだ少年期を想像することも、筆者には不可能である。青年期すでに（仮名読新聞）を経て）地方小新聞（甲府「觀風新聞」）記者